

近代スポーツを生んだ英国に見る ハイソサエティと共に進化してきた「スポーツ」

私たちが今、楽しむ近代スポーツの多くは、上流階級によって作られ、進化を遂げてきました。英国王室や紳士文化に精通する中野香織さんに、服飾史家ならではの視点を変え、スポーツとハイソサエティの関係を考察していただきます。

Interview & Text: MIHO KASHIWABARA

スポーツ精神はパブリックスクールで育まれた



3 映画「炎のランナー」には英国におけるアマチュアリズムとプロフェッショナリズムの考え方がよく表れています。4 パブリックスクールのひとつ、名門ラグビー校からはラグビーが生まれました。

2

19世紀、スポーツの発展に大きく関わったのがパブリックスクールです。英国の支配階級、ジェントルマン階級の子弟が学ぶパブリックスクールでは、体育（特に団体スポーツ）はギリシャ語やラテン語という古典と並び教育の柱。支配階級に必要なのは、古典で思想や教養を養い、体育で人格と肉体を鍛えることと考えられる一方、役に立つ実学は商人のものと軽んじられていました。古典とスポーツが同等とは興味深いですが、集団スポーツのなかで秩序立てたルールのもとで体を使い、集団行動やフェアプレーの精神を身に付けさせたのです。

またジェントルマン階級はプロフェッショナリズム、すなわちスポーツによってお金を取ることを嫌いました。スポーツは紳士の嗜み、アマチュアリズムとして鏡うなかで評価されるべきという考えも生まれました。しかしパブリックスクールで培われたことは実践にも大いに役立ち、ナポレオンとの最後の戦い、ワーテルローの戦いの勝利につながったといわれています。ジェントルマン教育における体育は大英帝国の繁栄と密接に結び付いており、英国発の団体スポーツにはそのような側面があります。

スポーツの成り立ちは有閑階級の暇つぶしから？

1

ラグビー、サッカー、ボート、テニス、陸上競技など、近代スポーツの数々が生まれたのは18～19世紀の英国です。スポーツという言葉の語源は、ラテン語のdeportareから派生し、「気持ちをあつちから別の場所に連れて行く」という意味をもつ英語のdisport。スポーツとは本来、気晴らしのようなもの、有閑階級のお遊戯を起源とするもので、賭け事や既婚婦人との情事までがスポーツと呼ばれていました。先史時代にさかのぼれば狩猟に端を発した運動が発祥といえますが、近代スポーツは有閑階級に愛され育まれてきたお楽しみでした。

そのため、当初はいわゆるスポーツウエアというものがない存在せず、暇な時間にちょっとテニスをするために、服の袖を少し折り曲げて…という程度。テニスウエアやゴルフウエアが今でも普通の服に近いのはその影響です。それだからこそ、英国の紳士発のスポーツは必ずファッションを生んでいます。現在の「ブレザー」の起源は、有名なボートレースのヘンリー・ロイヤル・レガッタにあります。ケンブリッジ大学のボート部の漕ぎ手が着ていた英（ブレイズ）のように赤いフランネルの上着がブレザーの始まりといわれます。

1 1931年当時の、ゴルフをする女性。2 7月上旬にテムズ川沿いの町で行われるヘンリー・ロイヤル・レガッタ。王室が後援するこの競技は、今や定番アイテムのブレザーを生み、育てました。





4

王室が大会を後援することが多い英国では、スポーツ観戦が社交の舞台にもなっています。その最たるものがロイヤルアスコット、1711年にアン女王の命令で始まった競馬です。社交行事の花形とされ、女王が観戦するエリアでは、観客は帽子着用などの伝統的なドレスコードが求められます。その観戦ファッションは場に良識や気品を添えると同時に、英国らしさを好む世界の人々に対するトレンド発信源になります。上流階級には、ファッションブルに装うことで競技を盛り立て、支援するという役目もあるのです。

近年、スポーツの支援者として大きな存在となっているのがラグジュアリーブランドやスポーツブランド。多くのブランドが競技やアスリートへの支援や協力、スポーツを通じた社会貢献に取り組み、多様な形でスポーツとの蜜月関係を築いています。さらに今はアスリート自身がセレブとなり、ノブレス・オブリージュを求められる存在に。個人でも支援団体を立ち上げ、社会貢献をリードする姿が当たり前にもなっています。長きにわたり特権階級と共に進化してきたスポーツ。今後その役割は、ブランドやアスリートが担っていくかもしれません。



8 プロテニス選手のセリーナ・ウィリアムズ。2019年のMETガラではチャーマンに。9 プロサッカー選手のリオネル・メッシは子どもたちのための財団を設立。10 正装が求められるロイヤルアスコット。



Profile

中野香織 | Akemi Nakano

なかの・かおり ● エッセイスト、服飾史家、昭和女子大学客員教授。ファッション史から最新モード事情まで研究、執筆、講演をおこなうほか、企業のアドバイザーをつとめる。東京大学大学院修了後、英ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授を務めた。著書「イノベーター」で読むアパレル企業史、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」他多数。

ロイヤルメンバーとオリンピックの深い関係

3

国を問わず支配階級の頂点、王族には、オリンピックが多いことを存じてしょうか。セーリングではギリシャ国王のコンスタンティノス2世がローマ五輪で金メダル、スペイン王室やノルウェー王室は2世代にわたって出場。馬術では英国のエリザベス女王の孫、ザラ・ティンダルがロンドン五輪で銀メダルを獲得しました。王族は幼い頃から教育や趣味の一環としてヨットや乗馬をするなかで自然にスキルが磨かれ、オリンピック出場にまでつながっているのが、スポーツが有閑階級発祥であることを象徴しています。

王族とスポーツとの関わりは、競技や大会の後援という形でも密接です。例えばオリンピックにおいては世界のほとんどの王室がIOC委員を出していますが、そもそも近代オリンピックの父、ピエール・ドゥ・クーベルタン男爵の理念に共感した貴族たちが、ノブレス・オブリージュとして自腹で活動に参加していたのが初期のIOCでした。思えば、古代オリンピックはゼウスの神に捧げるもの。現代では、神の代わりに、社会的地位の高い人が見守る存在としてそこにいることが求心力になっているのではないのでしょうか。



5 スキーは王族の必須スポーツ。スイスのヴェルビエはベルギー王室（写真）など欧州王室の社交場。6 スペインのフェリペ国王は皇太子時代、バルセロナ五輪のセーリング競技、ソリング級で6位に入賞。7 ロンドン五輪の銀メダリスト、英国のザラ・ティンダル。母親のアン女王もモントリオール五輪に馬術で出場。